学芸活動だより　第144号

ふるさと奥尻通信

令和7年7月11日
奥尻町教育委員会発行
事務局：01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。 奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

巻頭言

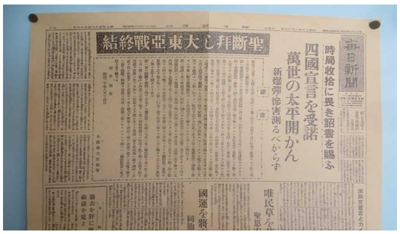
1945年8月15日を「終戦」ととらえるか、「敗戦」ととらえるか。立場によって違うとも言えますし、個々人の捉え方次第だとも言えます。正式な降伏調印は9月2日の米軍艦ミズーリ上でした。

特集　戦後80年に考える

第二次世界大戦（1939年～1945年）が終結して80年目となりました。当時の戦域は大きく2つに分けられ、大日本帝国が米・英・中・ソの連合国と戦ったアジア・太平洋戦争（日中戦争を含めると1937年～1945年。1931年の満州事変から数えて「十五年戦争」との呼称もある）、独・伊ら枢軸国が連合国と戦った欧州戦線があります。日本は中国大陸のみならず中部太平洋からインドまで、独は北アフリカからソ連西側、スカンジナビア半島まで大きく戦局を広げましたが、いづれも最終的に連合国軍に自国まで侵攻され、首都攻撃ののち、無条件降伏しています。日本の戦争犠牲者は310万人以上、アジア全体では2000万人以上と推計されていますが、正確な数字は判明していません。

さて、そのような世界的惨禍から80年が経過し、体験者のほとんどが鬼籍に入り、歴史的事実の継承が容易ではなくなってきています。現在では現物資料やそれらを基にした展示物、証言記録、専門的及び一般向け書物などによって個々人が歴史を追体験することで、当時の状況を想像し、理解を深める必要があります。

日の丸の寄せ書き


聖断拝し大東亜戦終結
時局收拾に畏き詔書を賜ふ
四國宣言を受諾
萬世の太平開かん

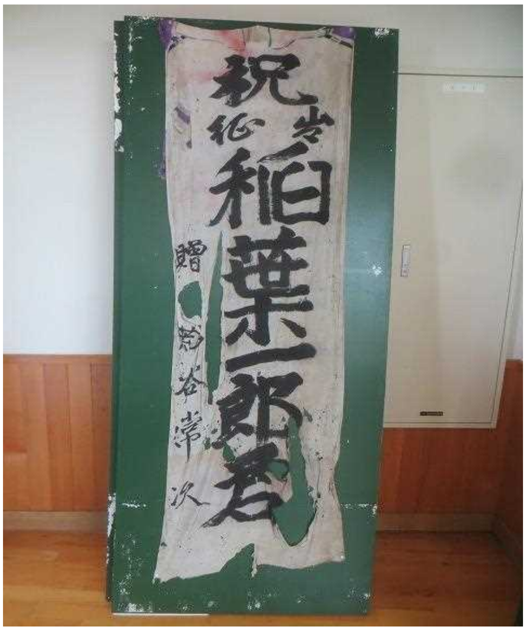
終戦を報じる毎日新聞（複製）

それだけに、これまでのような教科書学習や平和学習というような教育機関が用意した一方的な学びではなく、個々人による主体的な学びが求められている、とも言えましょう。奥尻の場合、稲穂ふれあい研修センターに日本の戦争に係わる資料展示コーナーがあり、数は多くないながらも地元奥尻と帝国日本の戦争が結びついていたことを示す資料を見ることができます。

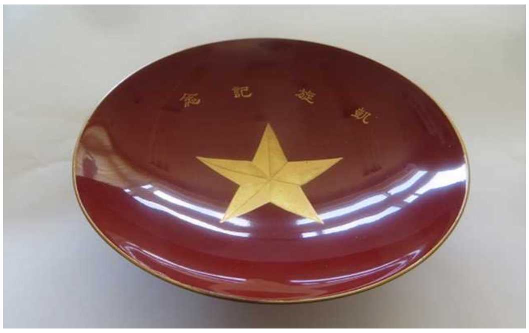
最近公開した資料の一例を挙げれば、応召した出征兵を見送るときに立てた「出征旗」と歩兵第二十六連隊の「凱旋記念盃」があります。この出征旗は、稲葉一郎が昭和13年9月の出征時に地元の荒谷常次が見送る時に立てたものと思われます（稲葉は16年6月帰還）。かなり破れていますが、現在まで残された理由は、戦後に大きな屏風をしまう時の包みに再利用されていたからで、戦後80年目に屏風とともに寄贈されて発見されました。

盃は外地（中国大陸など）や戦地に出動していた部隊が内地（国内）に帰還した際に渡される記念品で、「凱旋記念」「昭和十年三月」「歩二六」の銘が金文字で記されています。昭和7年9月の満州国（現在の中国東北部）独立承認後、翌9年に陸軍第七師団の各部隊が警備のために渡海して中国大陸へ向かいました。隷下の歩兵第二十六連隊も出動となり、同10年3月に帰還したことに由来します。召集されていた兵士が除隊となって奥尻に戻ってきた時に持ち帰ったのでしょう。

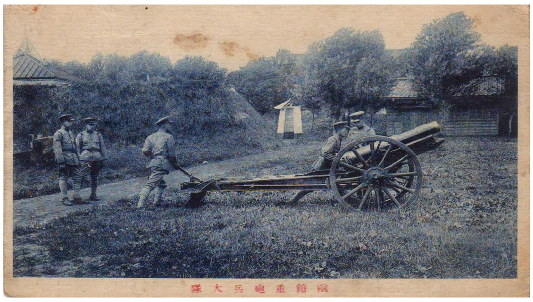
出征して、戦争を経験し、帰ってくる。無傷であれば幸いなことでしたが、その多くは戦死して白木の箱（空も多々）か傷病者となって帰り、戦争トラウマを抱えて戦後を長く生きた元兵士も大勢いました。個々人の記録は残されることが少なく、戦争後の実態は明らかになっていない場合がほとんどです。



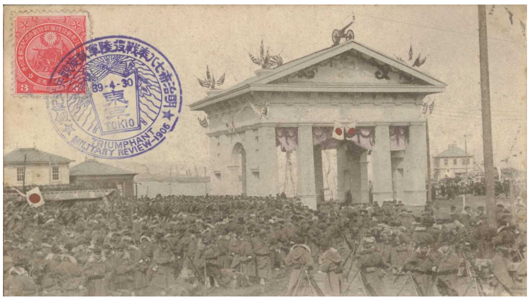
稲葉一郎の出征旗



歩兵第二十六連隊の凱旋盃

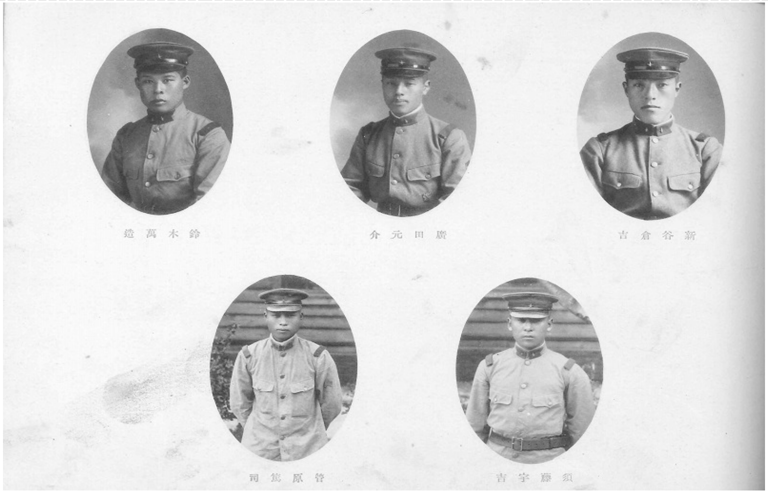


函館重砲兵大隊の訓練の様子　大正期



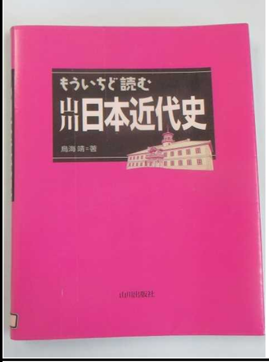
日露戦争から凱旋し室蘭に上陸した七師団

奥尻写真語　第61回　函館重砲兵大隊


鈴木萬造
廣田元介
新谷倉吉
菅原熊司
須藤宇吉

昭和2年10月、函館重砲兵大隊第三大隊を除隊した時に配られたアルバムに新谷倉吉上等兵（奥尻島青苗出身）が写っています。彼は大正7年3月に青苗小を卒業していますので、徴兵検査で合格し、現役で部隊に入隊して、満期除隊した時の記念品と思われます。名簿を見ると、他には地元函館、札幌、小樽、釧路、根室、十勝など全道に及び、遠く礼文島の兵士も確認できます。道外からは第八師団管轄の秋田、山形県下からの入営兵もいたことが判ります。歩兵とは違って、複数の連隊区にまたがって人員を確保していたことになります。

学芸員の本棚　61冊目



学芸員オススメの一冊をご紹介します。本は海洋研修センター図書室で借りられます。

もういちど読む山川日本近代史
鳥海　靖

歴史の勉強は小中高と進むにつれて、より詳しく、細かくなってきます。学校での歴史の勉強は暗記科目のように思われがちですが、それは年号ぐらいなもので、それぞれの幕に合わせて登場人物が入れ替わり、物語が展開していくと捉えれば、一本のストーリー（歴史）となり、理解しやすくなります。人物の人間性に興味関心を持てば、さらに面白く感じられます。

奥尻のつり　2025年春号

5月27日、6月1日、8日の3回に分けて、養殖サーモン「淡雪（あわゆき）」の水揚げが奥尻港で行われました。8日は町民への頒布もあり、1キロ1,000円にて売り渡しされました。今年で4年目ということで、事業が軌道に乗るころでしょうか。道南地方の各市町村ではどこも同じようなサケ・マス類の養殖事業を始めています。独自性やブランド化が求められるところです。5月～6月中旬、島内の松江港や赤石港ではヤリイカの回遊があり、愛好家がたくさん集まり、夜中まで浮き釣りのライトの明かりがチラホラ見えていました。時には朝までイカの群れが続いた日もあったようです。今年の天然ウニ漁は7月10日解禁となっています。養殖物は6月中旬から出ていましたが、全国の奥尻ウニのファンを満足させることでしょう。

昭和奥尻生活詩　冬休みの生活　第11回

釣石尋常小学校高等科一年生　文集「島の子」第三号

（どうして俺は親に口答えするんだろう）、と、床の中でこんな事を考えていた。いのに、藥の苦いのが、口の中に残っていて、なかなか眠られなかった。其の中に、時計が、九時を打ったのを聞いた。左側に向いたり、右側に向いたりして寝返りを打って、いる中に、熱の為に、眠ってしまった。夜中に恐ろしい夢を見て、何回も目を覚した。「罰だ」と言った母の言葉が心配になった。次の朝、時計が六時を打った、音で目を覚ました、半紙版のガラス、二枚合せた、小窓に雪が、半程迄積っていた、

つづく

読書のススメ

秋の夜長には読書とよく言われますが、夜は眼が疲れやすいので、どうでしょうかね。明るい内に読みたいところですが、日中は色々とやることがあって難しいですかね。読書好きは内向的で大人しいようなイメージをもたれがちですが、そんなこともないでしょう。取り入れた知識や情報を適度に出していくことで還元となります。

青苗遺跡発掘終わる

四月二十八～五月四日まで福島大学考古学研究室により青苗遺跡の発掘が行われました。一昨年から足かけ三年、三回目の調査となりましたが、今回で最終回となり、年度末に報告書を刊行する予定です。昨年夏に掘った場所を少し拡張して、土器の出る範囲や溝の掘られた時代などについて、最終的な確認をしました。発掘した土器などは、一度大学に持ち帰つて整理作業が進められています。

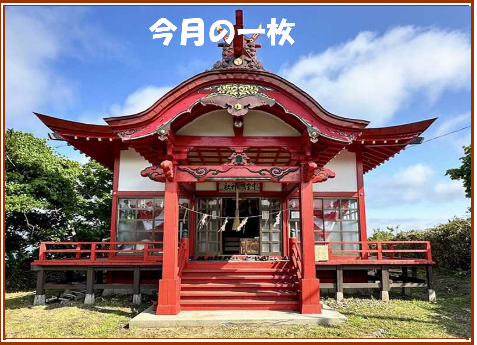
今年の調査現場の様子

新太之記録（編集後記）

戦災の民間罹災者には補償がなされていませんが、これは国難には耐えるべしという「受忍論」が根本にあるようです。軍人恩給にしても、命じた将官の方が、辛酸を舐めた下級兵士より額面が多いのは言うまでもありません。戦地となった国外には、未だ帰らぬ兵士達が遺骨となって野ざらしとなっています。戦争が生み出す不条理です。

宮津弁天宮の修繕終了

三月初旬より手がけていた宮津弁天宮の修繕作業が六月六日に終わりました。青苗の佐々木さんと宮津出身の山下さんが中心となり、連日大工作業と塗装作業を続け、無事に完成を迎えたものです。途中、四月二十六日には二回目の木材運搬を町民有志約三〇名で行い、費用軽減を図りました。二十七日は完成のお披露目会を行い、無事に終了しました。



修繕された宮津弁天宮　6月27日